



みまがき1300年
美作国建国1300年

おかやまの古建築さんぽ



はじめに

このガイドブックでは、岡山県内にある、江戸時代より前に造られた代表的な建物を紹介しています。建物には、寺院建築、神社建築、城郭建築、学校建築、民家などの分野がありますが、県内に残っている江戸時代より古い建物は、寺院建築と神社建築に限られてしまいます。

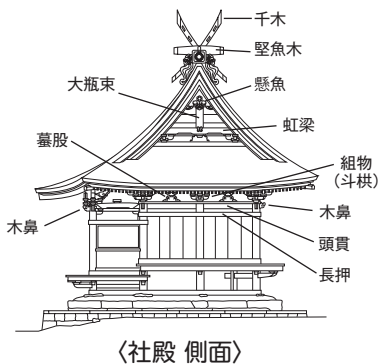
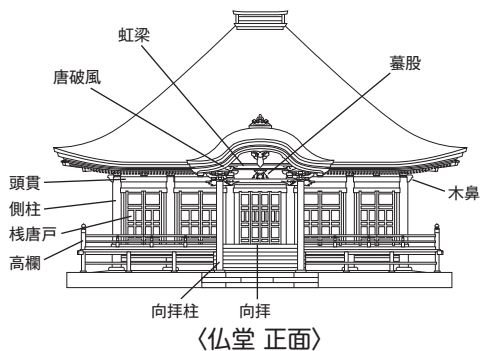
岡山県内には、奈良・平安といった古い時代の建物は、現在残っていません。最も古い建物は、鎌倉時代の1285年に建立された長福寺三重塔（美作市、3ページに掲載）です。1300年代の建物としても、1350年に建立された本山寺本堂（美咲町、4ページに掲載）、1357年建立とされる吉備津神社南随神門（岡山市、18ページに掲載）、そして1376年建立の宝福寺三重塔（総社市、16ページに掲載）の3棟しかありません。1400年代以降に建立された建物になると、その数も増えていきます。そして、江戸時代の建物となると、もともと数の少ない城郭建築や学校建築はあまりありませんが、寺院・神社・民家といった建物は、皆さんの住んでいる近くにも残っています。

さて、世界文化遺産に登録されている奈良県の法隆寺の金堂・五重塔などの建物は、小学校・中学校の教科書で「現存する世界最古の木造建築」と紹介されています。しかし、建立された7世紀のままの状態ではなく、幾度も修理され、現在に至っています。建物を残そうとする、1300年以上にわたる人々の思い、努力や苦労が積み重なっているのです。それは法隆寺だけではなく、皆さんの身近にある建物も同様だと思います。古い建物を見学する時は、その建物が持つ美しさを感じていただくとともに、その建物を残そうとしてきた先人たちの思いも一緒に感じてもらえれば幸いです。

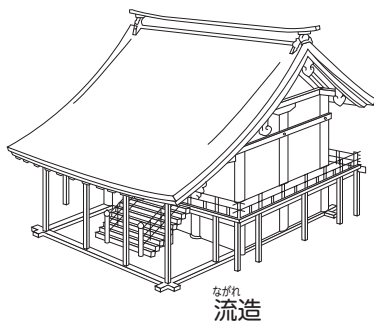
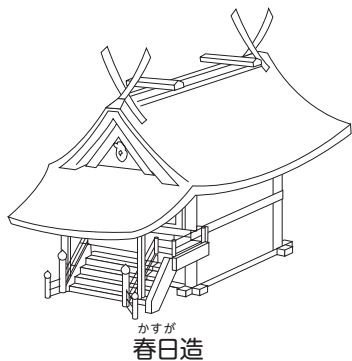
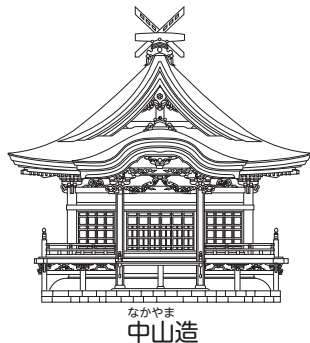
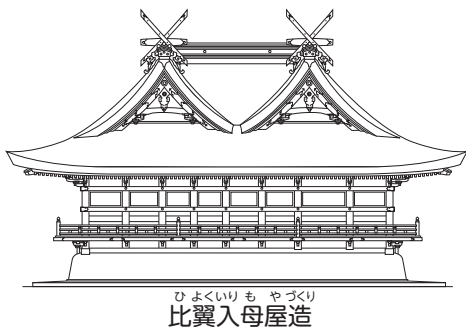
それでは、ガイドブックを片手に、県内の代表的な古建築を散歩してみましょう。

※本文で取り上げている建造物は、昔の美作国・備前国・備中国の三つの国に分けて、それぞれ古い順に説明しています。

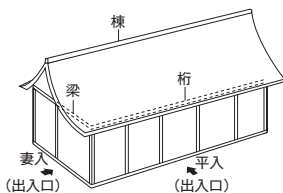
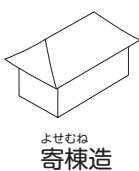
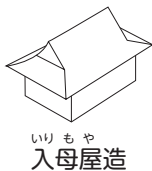
古建築の名称



神社建築の様式



屋根形式



鎌倉時代の1285年(弘安8年)に、円源という僧侶が、地元の武士江見左馬頭の力を借りて建てたもので、県内に残っている木造建築の中で最も古いものです。大工が畠久郡下阿知村(現在の岡山市東区下阿知)の国右衛門尉であることも分かっています。

高さは22.1mで、1階は4.3m四方、2階は3.4m四方、3階は2.8m四方と、階が上がるごとに少しずつ小さくなります。屋根は、小さく薄い板でふかれたこけら葺と呼ばれるもので、少しずつ小さくなる屋根のバランスとその曲線など、すべてに整った美しさを見せる建物です。



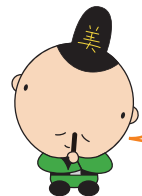
周辺略図





室町時代初めの1350年（観応元年）の建築といわれるこの本堂は、平面14.7m四方、屋根は寄棟造で、ヒノキの皮でおおわれた、檜皮葺となっています。また、正面階段の上に張り出した向拝は、江戸時代前期に付けられたものです。この本堂は、奈良時代から平安時代に完成した和様と呼ばれる様式に、中国の影響を受けた禅宗様と呼ばれる装飾性の高い様式を取りこんだ、折衷様の建築です。屋根の曲線の優雅な伸びや細部の装飾など、見る人の目を楽しませてくれます。

本堂のほかにも、1654年（承応3年）建築の三重塔（国重文）、17世紀中期の建築で、徳川家光などをまつる霊廟（県重文）、17世紀末の建築と考えられる常行堂（県重文）などがあります。



「向拝」は、寺院や神社の正面で、屋根を前に張り出した場所です。参拝者が礼拝をするところになっています。





宇南寺は、鎌倉幕府を打倒しようとして失敗した後醍醐天皇が、1332年（元弘2年）隱岐に行く途中に宿泊したと伝えられていますが、今の本堂は1510年（永正7年）に再建されたことが分かっています。平面は正面10.6m、側面8.5m、入母屋造の屋根で現在は銅板がふかれています。舟肘木と呼ばれる組物（柱の上にあって軒を支える部分）など、飾りがほとんどない簡素な構造ですが、大形の木材を使用した堂々とした建物で、落ち着いた雰囲気を感じさせます。



簡素な組物（舟肘木）

周辺略図



ぶつ きょう じ ちん じゅ しゃ ほん でん
佛教寺鎮守社本殿
 (久米南町仏教寺〈県重要文化財〉)



本堂のある場所より一段高いところに、この鎮守社はあります。本殿の建築年代は、室町時代の15世紀末期から16世紀前期と考えられています。正面4.8m、側面2.5mの大きさの本殿は、美作地方に多い中山造（7ページ参照）ではなく、全国的には最も多い流造ながれと呼ばれる建築様式です。江戸時代前期に大規模な修理がなされていますが、建築されたころの形をよく残しており、中世の神社建築として貴重です。

周辺略図





縁まわり下の装飾

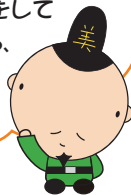


本殿

平安時代後期には、「一宮」「二宮」などと各国ごとに国内の神社を格付けるようになります。美作国の一宮が、中山神社です。

現在の本殿は、1559年(永祿2年)に、現在の島根県安来市にあった富田城の城主尼子晴久によって再建されたものです。その後1885年(明治18年)に現在の位置に移されました。規模は10.5m四方、入母屋造で、妻入に向拝を設けて唐破風をつけた構造は、この神社の名をとって「中山造」と呼ばれています。この様式は美作地域に多く見られ、もっとも古い建物がこの本殿です。彩色彫刻がほどこされた蟬股は室町時代の特徴をよく表した優れたものです。また、江戸時代と伝えられる縁まわりの下の華やかな装飾も、美作地域で見られるものです。

「蟬股」は、上方の重量を支えるための部材で、下方が開いてカエルが足を広げたような形をしていることから、この名前があります。



周辺略図





平安時代、国内の神社に祭られている神を1カ所に集め、国司（諸国に派遣された役人）の参拝に便利なように「総社」と呼ばれる神社が作られます。美作国の総社は、この神社に置かれました。

現在の本殿は、1562年（永禄5年）に、現在の広島県安芸高田市にあった吉田城の城主毛利元就が戦いの勝利を祝って再建したものです。その後、1656年（明暦2年）に津山藩主森長継によって大規模な修理がなされています。平面9.8m四方の規模で、美作地域に多い中山造のはなやかで立派な建物です。しかし、屋根の大棟にある千木、堅魚木を省略し、向拝の唐破風の上に千鳥破風を置くなどしており、ほかに例を見ない神社建築ともなっています。



唐破風の上にある三角形の千鳥破風

周辺略図



周囲の緑と調和した落ち着いた雰囲気の中に大滝山福生寺の三重塔は建っています。1441年(嘉吉元年)に室町幕府6代將軍足利義教が再建したと伝えられ、室町時代の特徴がよく現れています。1階の平面は3.8m四方、高さ19.7mで、本瓦をふいています。周囲の緑ともうまく調和し屋根の曲線も美しく、躍動感にあふれた優美な塔です。

県指定重要文化財の仁王門は、三重塔に行く途中の道沿いにあります。

県内でも数少ない17世紀初期の門建築です。また1682年(天和2年)に造られた本堂も県指定重要文化財です。



周辺略図





「瓶井の赤門」として親しまれているこの門は、1456年（康正2年）の建築と伝えられ、その後1676年（延宝4年）に大改造をうけたと考えられています。平面は、正面6.0m、側面3.6mの規模で、柱などは朱色に塗られています。中央部を通路として、その両脇には金剛力士像が置かれています。木鼻などの彫刻に室町時代中期の様式がみられ、建

物全体がバランスのとれたデザインとなっています。

周辺略図



木鼻

「木鼻」は、頭骨(かしらぬき)、柱の上部のつなぎとした横木)などの端が、柱から突き出た部分です。



ほん れん じ ほん どう ちゅう もん ばん じん どう

本蓮寺本堂、中門、番神堂

(瀬戸内市牛窓町牛窓 〈国重要文化財〉)



本堂

バランスのとれた外観が特徴の本堂は、1492年(明応元年)の建築で、正面11.1m、側面11.7m、屋根は寄棟造で本瓦葺です。中門は、本堂とほぼ同時期の建築で、間口2.4m、本柱2本の前後に計4本の控え柱を建てた、特異な構造となっています。「法華経」というお経を守る神をまつた番神堂は、向かって右の東祠が1468年(応仁2年)、中央の中祠が明応年間(1492年～1501年)、左の西祠が1500年(明応9年)の建築とみられます。



番神堂

周辺略図



くま の じん じゃ ほん でん だいに でん
熊野神社本殿第二殿
 (倉敷市林〈国重要文化財〉)

この神社の本殿は6棟の建物から構成されており、中央にある第二殿が国の重要文化財に指定されています。1492年（明応元年）に建築された、奈良市の春日神社に代表される春日造という様式で、屋根はヒノキの皮がふかれています。正面2.6m、側面3.8mと大きくはありませんが、朱色、黄色や白色で美しく装飾されています。



周辺略図



その他の本殿は、岡山藩主池田光政により再建され、県指定重要文化財となっています。

しん こう じ ほん どう さん じゅうのとう
真光寺本堂・三重塔

(備前市西片上〈国重要文化財〉)

本堂は、^{おうえい}応永年間
 (1394年～1428
 年)に再建されたお
 堂を、1516年(永
 正^{えい}13年)に大改修
 したものです。平面
 は正面11.9m、側面
 12.2mで、屋根は
 入母屋造・本瓦葺で
 す。内部の彩色のあ
 る彫刻には、^{さいしき}桃山時
 代の特色がよく現れ
 ています。

三重塔は、1601
 年(慶長^{けいちょう}6年)に瀬戸内市牛窓町の蓮花頂寺か
 ら移築されたもので、部材の様式から室町時
 代の建築と考えられます。1階の平面は3.8m
 四方、高さ18.2mのやや小ぶりの塔で、本瓦
 がふかれています。1階の臺段などに室町時代
 の特徴がよく現れています。



本堂



三重塔

周辺略図





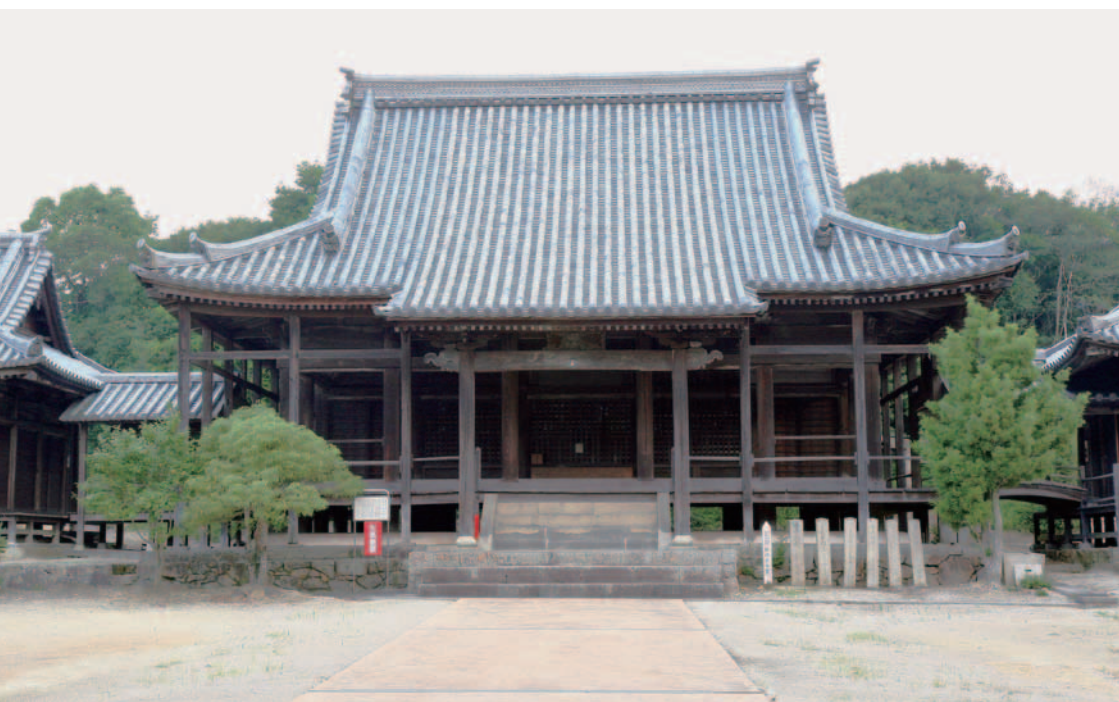
この本堂は、1570年（永禄13年）に建築されましたが、江戸時代に向拝が増築されるなどの改修をうけています。平面は、正面11.2m、側面11.8m、屋根は入母屋造で、本瓦がふかれています。内部の須弥壇や厨子には、桃山時代の特徴をもつ優れた彫刻があります。

境内には、文化年間（1804年～1817年）に造られた三重塔（県指定重要文化財）などもあります。



周辺略図





この本堂は、1579年(天正7年)に建築され、江戸時代中期に現在の場所に移築されました。平面は、正面11.9m、側面11.8m、屋根は入母屋造で本瓦がふかれています。江戸時代の改修部分が多いものの、室町時代の特徴もよく残っています。

境内にある多宝塔は、1690年(元禄3年)に建てられたもので、県指定重要文化財となっています。



周辺略図



き び つ じん じゃ ほん でん およ はい でん
吉備津神社本殿及び拝殿、
 みなみ ずい じん もん きた ずい じん もん
南随神門、北随神門

(岡山市北区吉備津〈国宝、国重要文化財〉)

吉備津神社の本殿及び拝殿は、1390年(明徳元年)室町幕府3代将軍足利義満が再興に着手し、1425年(応永32年)に完成しています。本殿は、入母屋造の建物を2つ合わせた形をしており、「比翼入母屋造(吉備津造)」と呼ばれる独特なものです。規模は正面14.6m、側面17.7mで、建物面積は約258㎡と大きな建物となっています。基礎は丸く漆喰などで固めまんじゅうのようにした高い亀腹を造り、70本もの円柱を支えています。

拝殿は本殿に接して建てられ、正面が切妻造の屋根にはヒノキの皮がふかれ、正面と側面には裳階と呼ばれる庇が設けられています。内部は豪快な木組を見ることができます。本殿・拝殿とも日本的なやわらかな美しさを持つ和様に、鎌倉時代に大陸から伝わっ



本殿及び拝殿

た大仏様、^{ぜんしゅう}禅宗様の様式が取り入れられています。

長い回廊^{かいろう}の中ほどに位置する南随神門は、1357年（延文2年）に建てられたと伝えられ、吉備津神社の建物の中で最も古いものとされています。正面6.2m、側面3.2m、屋根は入母屋造で本瓦^{ほんがわら}をふいています。木鼻^{きばな}、鬘股^{かえるまた}の様式や手法は、鎌倉時代^{かまくら}の様式をしのばせます。また北随神門は、駐車場から本殿に向かう石段の途中にあり、1542年（天文11年）に屋根のふき替えをしたという記録があることなどから、室町時代中期に建てられたと考えられています。正面7.5m、側面3.9m、屋根は入母屋造でヒノキの皮をふいています。

周辺略図



南随神門



北随神門

よし かわ はち まん ぐう ほん でん

吉川八幡宮本殿

(吉備中央町吉川〈国重要文化財〉)



室町時代前期の1395年（応永^{おうえい}2年）に建築されたとする棟札^{むなふた}が残されていますが、組物^{くみもの}や蟄股^{かえるまた}の特色から、室町時代後期の建築と考えられています。また、江戸時代の正徳年間（1711年～1715年）に大修理が行われています。正面10.9m、側面7.1m、屋根は入母屋造^{いりもや}で小さな板を重ねてふいています。

本殿の前には、切妻造の拝殿（県重文）があり、平面がT字型になるめずらしい姿となっています。



室町時代末期から江戸時代前期の華麗なデザイン
を見ることができると随神門
(県重文)もあります。



この三重塔は昭和42年に修理されましたが、その際に発見された文字から、1416年（応永23年）に再建されたことが判明しました。1階の平面は4.0m四方で、高さは21.3mあり、屋根は本瓦^{ほんがわら}でふか^{のき}かれています。軒が長く張り出し、全体の均整がとれた端正^{たんせい}な姿は、この建物を格調高いものにしています。



周辺略図





1497年(明応6年)の建築と伝えられているこの社は、正面1.8m、側面1.5m、屋根は流造ながれと呼ばれている形式です。小さい社ですが、柱くもの、組物かべや板壁などは豊かに彩られており、緻密な彫刻ともあいまって、大変はな華やかな建物となっています。

周辺略図



あざやかな蔓股

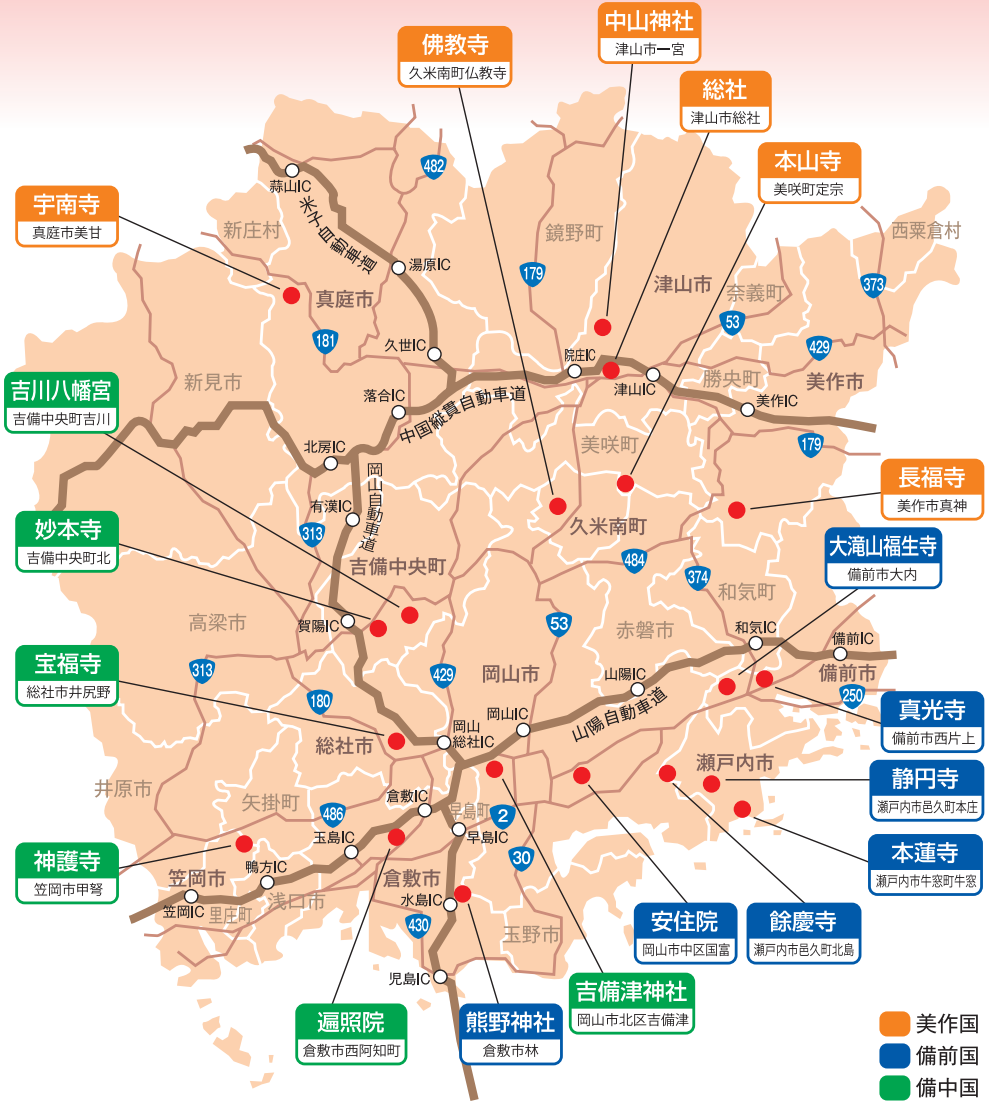


もとは「^{じんぐうじ}神宮寺」と呼んでいたようであり、1568年(永禄11年)に小田^{おだ}高^{たか}清^{きよ}の力により、藤原^{ふじわら}乗^{のり}久^{ひさ}が大工として建立したことが記されています。規模は正面8.1m、側面7.9mで、屋根は寄棟造で本瓦がふかれています。なお、1587年(天正15年)に瓦ぶき工事が完成したことが記された棟札が残されており、完成まで20年近く時間がかかったことが分かります。向拝全体が江戸時代のものであったり、後世の部材なども使用されていますが、柱や屋根などはほぼ完成当初の形態を残しています。

周辺略図



所在マップ



- 発行日 平成25年10月15日
- 発行 岡山県教育委員会
- 編集 岡山県教育庁文化財課
〒700-8570 岡山市北区内山下2-4-6 電話086-226-7601 (直通)
- 協力 岡山県古代吉備文化財センター、岡山県立岡山城東高等学校、岡山県立博物館、岡山市立西大寺小学校、岡山市立芳泉中学校